

今こそ望まれる変化—日本の動物福祉を考える

A RKが設立されて以来、10年という月日が流れました。これを機会にこの10年間で日本において変化したこと、しなかったこと、改善されたこと、されなかったことを振り返ってみたいと思います。

社会における動物の役割というもののに対する考え方が変わってきたのは確かだと言えるでしょう。救助犬、セラピー犬、介護犬など、今までにはなかったような新しい役割が急速に増えてきましたし、ペットロス症候群のためのカウンセリングが行われるようになり、またレンタルペットなどを通して、飼い主としての責任を負わずに動物からの癒しを得ることもできるようになってきました。

ベビーシッターならぬペットシッターという認識も広まり、老人ホームや病院への訪問などのペット関連のプログラムも増えています。また保健所ですえ、ペット愛護センターを設置するなど、「動物を殺す役所」から「動物を大切にする役所」へとそのイメージチェンジをはかっています。

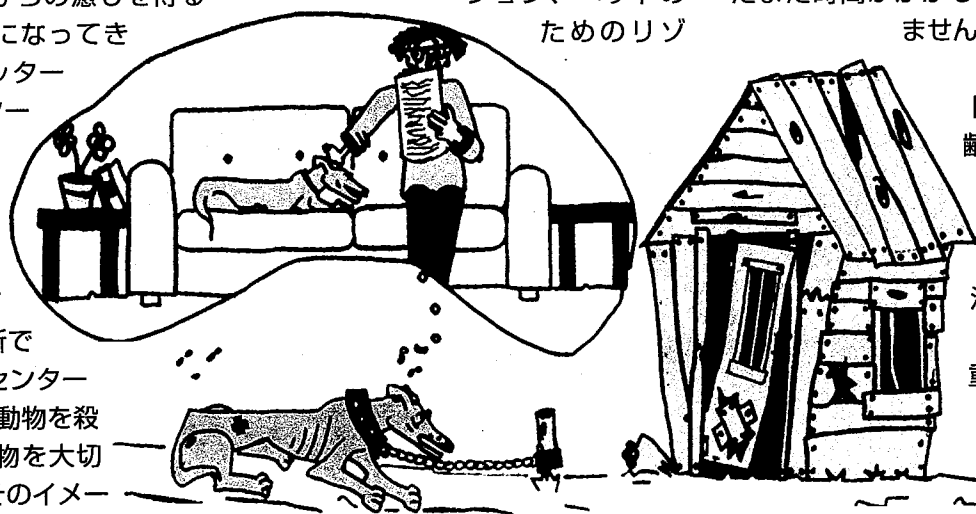
これらはすべて前向きな変化といえますが、その一方で動物自身の幸福を考えることはそれほど進んでいるとは言えません。現在の状態は、基礎となる部分ができていないのに、頂上だけが完成してしまったピラミッドのようなものです。つまり、これら動物関連の様々な動きには、動物に対する深い思いやりと、動物の立場に立った前向きな姿勢が欠けていると思えるのです。

これまでの古い「伝統的な」動物の飼い方と新しい「現代的な」飼い方の差は広がり続けています。「古い」飼い方というのは、犬に鎖を付けて外につなぎ、ろくに手入れをせず、残飯を餌として与え、散歩もたまにしかないというものです。そして

こういう飼い方をされた犬がたまの散歩で世間の目にさらされて「犬は汚くて、うるさくて、危険で、かみつくもの」というイメージをさらに広めてしまうのです。そんな飼い方をされれば、犬はそういう生き物になってしまいがちだからです。

「新しい」飼い主というのは、ペットの面倒をよく見る人々です。健康や食事に気を配り、ペットを家の中に入れ、家族の一員のように扱います。こういう新しい飼い方の広まりによって、ペット関連産業が大いに成長してきました。様々な食餌療法用のペットフード、ペットファッション、ペットの

ためのリゾ



ートホテルやブティックや喫茶店、ペットのための様々な活動をするクラブなどの広まりが見られます。これらのペット産業の繁栄にはもちろん、商売目当てのブリーダーや、ペットブームにつけ込んで儲けをたくらむペットショップが増えるなどのマイナスの面もあります。

このように個々の日本人の動物に対する考え方は変わってきましたが、全体としては、日本の社会は依然として動物に対して厳しいままです。何十億円という費用が愛護センターにつぎ込まれてはいるものの、多くのペットたちが捨てられ、一般家庭のゴミのように集められ、日本全国の保健所で非常に原始的で残酷な方法で殺され続けています。ほとんど

の公園では犬が立入禁止になっており、犬を怖がる人々がたくさんいるために、犬を飼っている人々は夜になってからしかペットを外で運動させられないという現状です。たいていの母親は子供たちに「犬はかむから気を付けなさい」と注意しますが、こういうことが犬を怖がる子供たちを増やす原因になっています。どんなによくしつけられた犬でも、つながれていなければ飼い主はひどい中傷を受けることになりすし、ペットを受け入れるホテルや公共の建物やタクシーはほとんどありません。こういう現状を見ると、動物にとって住みやすい社会を実現するにはまだまだ時間がかかるといわざるを得ません。

日本の社会の高齢化が進み、一人暮らしの人口が増えるに連れ、人々の生活におけるペットの役割はより重要なものとなっていくはずです。ペットを飼うことは、そのまま孤独

感の解消につながるだけでなく、自然に、より行動的になるような刺激となり、それによって個人の健康が向上することは、国の医療費負担の削減にもつながるのです。政治家たちも少しずつこのことに気づき始め、ごく最近、公団住宅がペットを飼うことを許可することになるということが報道されました。しかし、政策の変化だけではなく、動物嫌いの人々の認識が変わることが大切です。世の中には動物好きの人々がいて、ペットは人間の社会に好ましい効果をもたらすという事実を受け入れてもらいたいのです。日本において本当の動物の幸福を実現するためにもっとも必要なのはこういう意識の変化なのです。